

仏典におけるナーガ

定 方 晟

辞書によると、インド語のナーガ (nāga) には「象」の意味もあれば、「蛇」の意味もある。後者には更に自然的存在としての蛇と神格化された蛇(「竜」とがある。一つの単語がこのように複雑な内容をもつとすれば、それはこの語に接する人を困惑させずにはおかないと思われる。それにも拘らず、この多義性のもつ意味がいまだ十分な研究の対象とされたことがない。いま私は、ナーガの語に照明をあてることにより、その背後に潜む一つの歴史的事実を浮きあがらせてみたい。(この問題に関して存在する膨大な資料のうち、私が利用しえたのはほんの僅かにすぎない。しかし、Vogel も言うように、この問題に関しては、資料収集の徹底を画ることとは余り意味がないと思われる。)

最も古い仏典の一つとされるスッタニパータには nāga の語が 11 回現われる。そのうち最初の 4 回(「牡牛のように結縛を断ち、^{ナーガ}象のように臭う蔓草を踏みにじり、わたくしはもはや母胎に入ることはないであろう。(第 29 偈前半)」(中村元博士訳、以下同じ)。「あたかも肩がよく発育し、斑紋ある巨大な象が、その群を離れて、欲するがままに森の中を遊歩するように、犀の角のようにただ独り歩め。(第 53 偈)」「諸々の欲望をかえりみることなく、あたかも獅子のように^{ナーガ}象のように独り行くかれに近づいて、われらは尋ねよう、死の縛めから解き放たれる道を。(第 166 偈)」「^{ナーガ}象の群を先頭とする精鋭な軍隊を整えて、わたしはあなたに財を与えよう。(第 421 偈前半)」)においては、nāga が象を意味することは確実である。ところが、後の 7 回(「何を得た人をバラモンと呼ぶのですか？ 何によって道の人と呼ぶのですか？ どうして沐浴者と呼ぶのですか？ どうして nāga と呼ぶのですか？ 先生……おたずねしますが、どうかわたくしに説明してください。(第 518 偈)」「世間にあっていかなる罪惡をもつくらず、一切の結び目の束縛を捨て去り、あらゆることにとられることなしに解脱している人、——このような人はまさにその故に nāga と呼ばれるのである。(第 522 偈)」「nāga の中の nāga であり偉大な英雄であるあなたが説くときには、すべての神々は、ナーラダ、パッパタの両者とともに随喜する。(第 543 偈)」「これら三百人の修行僧は、合掌して立っています。雄者よ、足をお伸ばしください。諸々の nāga をして師を拜ませましょう。(第 573 偈)」「nāga は諸々の(偏見)を離れて世間を遍歴するのであるから、それらを固執して論争してはならな

い。(第 845 偈前半)「聖者よ。あなたが懇切に教えみちびかれた人々もまた今や苦しみを捨ててでしょう。nāga よ。(第 1058 偈前半)」「執着の住所をすて、愛執を断ち、悩み動揺することなく、歓喜をすて、……賢明な(あなた)をお願いします。nāga のおことは聞いて、人々はここから立ち去るでしょう。(第 1101 偈)」になると、nāga が「象」であるのか「竜」であるのかわれわれは迷ってしまう。最初の四偈においては、nāga は自然的な存在としての動物であり、象であつた。象はそこでは(第 421 偈を除き)直喩(「如し」を用いる比喩)として用いられていた。ところが、後の七偈においては、nāga (それが何をさすかいまだ不明なので nāga としておく)は隱喩(表現上はたとえの形式をとらない修辭法。即ち、「如し」などを用いない。白髪を生じたことを「頭に霜をおく」という類。)として用いられている。英雄としての解脱者あるいは修行者をたどるのには「象」でも「竜」でもよさそうである。

しかし、次にダンマパダをみてみよう。これには nāgavagga という一章がある。ここでは、nāga は「林中を独り行くもの」(第 329 偈)、「少欲なるもの」(第 330 偈)として、修行者のとるべき態度の直喩に用いられている。(好ましからぬ nāga も出てくる。)これらの nāga は疑いなく「象」である。

次にテラガーターをみよう。nāga は十数ヶ所に出る(31, 244, 289, 684, 692-694, 696, 697, 703, 704, 967, 1105, 1141, 1240, 1279)が、そのうち幾つかが直喩として用いられ、スッタニパータ前半四偈やダンマパダの偈と共通性を示し、残る過半数が解脱者、修行者の隱喩に用いられ、スッタニパータ後半七偈と共通性を示している。(テラガーターでは象は *hatthi*, *kuñjara*, *gaja*, *vāraṇa* としても現われる。)

以上の三經において、nāga は(直喩であろうと、隱喩であろうと)修行、解脱に関連して言及されている点で一貫している。従つて、同じもの、つまり「象」を意味している可能性が強い。(「竜」は多く仏の守護者、礼拝者として現われる。)この点に関し、ウダーナヴェルガ 31.5 の *nāgaṃ prabhinnam* がダンマパダ 326, テラガーター 77 で *hatthiṃ pabhinnam* (*hatthippabhinnam*) となつていることは参考とすべきである (cf. Norman: Elders' Verses, I, p. 141)。

これら三經は現存仏典の最古層に属するもので、種々の点で(特に神話的要素の少ない点で)のちの經典と区別されうる。のちの仏典に頻繁に現われる「天、竜、夜叉……」の定型句がない。このような思想的变化の流れをみると、初期の仏教では nāga は専ら「象」を意味し、のちに次第に「竜」としての nāga が混じってきたのだという推測が可能である。

ここで仏教外の經典でもこれと平行な現象がみられるように思われることに注

意したい。マクドネルとキースによると、nāga はシャタパタブラーフマナ (xi. 2, 7, 12) に一度 mahānāga の形で現われるが、蛇を意味するか、象を意味するかは不明である。ブリハド・アーラニヤカ・ウパニシャッド (i. 3, 24) とアイタレーヤ・ブラーフマナ (viii. 22) においては、はつきり「象」の意味で現れる。スートラ (Āśvalāyana Gṛhya Sūtra, iii. 4. 1) にはすでに神秘の nāga が現われる (Macdonell & Keith: Vedic Index, Vol. I, p. 440)。(シャタパタブラーフマナの nāga も私には象でよいのではないかと思われる。etaddha sma vai tadvidvānāha/ śvetaketurāruṇeyaḥ kaṃ svidēvāpariṣu mahānāgamivābhisamsāraṃ didṛkṣitāro ya evametatprayājānāṃ yaśo vediteti//)

以上によつて、原始仏教時代には、「竜」としての nāga は存在しなかつた (少くとも重視されなかつた) という想定が許されそうである。しかるに、これ以後、仏典には「竜」としての nāga が天や夜叉とともに至るところに現われる。だが、このときにも、翻訳者はわれわれが想像するほどには nāga の翻訳にあたつて混乱をみせていない。恐らくわれわれが想像するほどには「象」のイメージと「竜」のイメージが重ならないからなのであろう。われわれにとつては「象」も「竜」も「偉大な存在」の比喩たりうる。しかし、仏典においては (少くとも早い仏典においては)「竜」は下級の神であり、異端的存在であり、ブッダや聖弟子の呼称たりえなかつたのではないか。

「象」と「竜」の区別は mahānāga と nāgarāja という二つの言葉の中にも厳然として存在するようにみえる。前者は「偉大なる象」であつて修行・解脱者の epithet となり、後者は「竜の王」であつて仏の調伏の対象になるか、仏の守護神となる。mahānāga は mahāvyutpatti においては Glañ-po chen-po (大なる象) と訳され、声聞巧徳名号の一つにあげられている。

そこで「竜」としての nāga 出現に目を向けてみよう。「ミリンダ王の問い」(パーリ本, 中村・早島共訳 I, II, III) をみるとその序話に「金翅鳥にかこまれた竜の如く」(I, p. 37) とある (この部分漢訳になし)。また、トレンクナー本 89 頁以下に相当する所 (漢訳にはない新しい部分) には、「悪鬼, 金翅鳥, 竜, 夜叉」が大洋の震動に恐れおののく場面 (II, p. 19) があり, 他にも竜は夜叉などと共に何度か出てくる。サンユッタ・ニカーヤには「竜相応」, 「金翅鳥相応」という節さえ現われている。ジャータカには人界に交わる竜の話が多い (cf. 前田恵学: インドの仏典に現われた竜と竜宮, 東海仏教 第 5 輯, 1959)。大乘經典になると「竜」としての nāga はもはや珍しくない。「天, 竜, 夜叉」は対告衆の一部として必ず言

及され、それはやがて八部衆に発展し、法華経ではその配列順位も固定する。

このように従来の「象」としての *nāga* に「竜」としての *nāga* が大量に混入した段階では、当然、*nāga* がいずれをさすかが問題となる（先に述べたようにある程度区別はつくが……）。テーラガーター第 692 偈に対する注釈は *nāga* に *ahināga*, *hatthināga*, *purisanāga* の区別があることを示している（Norman: op. cit., p. 177）。しかし、修行、解脱者を表わす *nāga* が「象」「竜」のいずれであるかは次第に明かでなくなる。大智度論では阿羅漢に対する呼称「摩訶那伽」を「象」でも「竜」でもよいように説明している（大正蔵 25, 81b）。一切経音義にも那伽の項に「此訳云竜、或云象、言其大力故、以喩焉也。」（大正蔵 54, 358c）、あるいは「梵語有三義、一云竜、二云象、三云不来、孔雀經名仏為那伽、由仏不更来生死故者也。」（同上 641b）とあり、この点は区別されていない。このように *nāga* に多義ありとすれば、場合によつては、漢訳者はその翻訳に窮して「竜象」と表わしたかもしれない。例えば、異部宗輪論に「竜象衆」とある（大正蔵 54, 15a）（あるいはそれは *hastināga* の訳だろうか）。しかし、多くの場合には、文脈によつてその区別はついたことと思われる。一方、時代とともに「象」としての *nāga* の使用はわすられていつたのではないかと思われる。

さて、「竜」としての *nāga* が仏典中で急速に勢力を増していくのと平行して、仏教をめぐる人物の名前にも *nāga* のつくものが目立つてくる。ブッダの直弟子には *nāga* のついたものが見当らないようである（スッタニパータによつての想定）。しかるに、アショーカ以前に、すでに「竜」としての *nāga* を名の一部にしたものが現われている。*śīśunāga* とか *nāgadāsaka* などがそれである。ヴァーユ・ブラーナなどはこれをピンピサーラ王（ブッダと同時代）の前におくが、マハーヴァンサなどは後におく（中村元：インド古代史上, p. 252f.）。これらの *nāga* が果して「竜」を意味するかどうかは問題であるが（Monier-Williams は *śīśunāga* を “young elephant” と訳している。Fergusson はこれを蛇と解釈する伝説——そこでは *śu śu* は蛇を逐う声として述べられている——を紹介している [Tree and Serpent Worship, 2nd ed., p. 68]), *nāgadāsaka*（「ナーガの使い」）という表現からは神格化された「竜」の觀念がうかゞえる。ルヌーも *śīśunāga* の *nāga* を「竜」と解釈している（L'Inde Classique, Tome I, § 1079）。そのほかにも *nāga* を含む名は沢山あらわれるが、「竜」と「象」の区別はつけ難い。「ナーガセーナ」については、漢訳では、家の象と同時に生れたので「ナーガセーナ」というのだと説明されている（大正蔵 32, 694b. パーリ語テキストにはこの部分なし）。しかし、一般には

「竜軍」と訳されている。(因みに、四兵の一つ「象兵」の原語は *hastikāya* である。) ナーガールジュナ、ナーグプルの *nāga* は「竜」であろう。(シャータヴァーハナ王がアナンタ竜の息子だという伝説もある——*Tree and Serpent Worship*, p. 666.)

ところで、「竜」としての *nāga* が仏教中に存在することをはつきり示す証拠が彫刻の中にある。パールフット（西紀前2世紀）の浮彫の一つに、ブッダ（樹で表わされている）に礼拝を捧げる蛇神の姿がある。池の中に一身五頭のcobraがおり、別の池の中に男1人（三頭のcobraを後頭部につけている）、女2人（一頭のcobraをつけている）がいて合掌している。図の中央にアショーカ時代の文字で *erapato nāgarājā bhagavato vandate* と刻んである。(望月仏教大辞典 1, p. 197, 及び附図 83.) 以後、この単頭ないし多頭のcobraはサーンチー仏塔やアマラーヴェティー仏塔の浮彫に少なからず現われる。現存する浮彫の中では、パールフットの浮彫がその後のナーガ彫刻の祖型になつたと考えてよさそうである(写真については *Tree and Serpent Worship* 参照)。「大唐西域記」によれば、如来が菩提樹下で最後の禪定に入つたとき、目支隣陀竜王 (*mucilinda*) が如来を守護して如来の体を七匝めぐり、化して多頭を出し、俯し垂れて蓋となつたという(大正蔵 51, 917b)。従つて、ボドガヤにもそのような彫刻が存在したことは考えられる。

さて、仏に帰依する「竜」は医羅鉢坦羅 (*elāpatra, erapato*) や目支隣陀だけではない。伽陵伽 (*kālika*)、阿波羅羅 (*apālāla*)、さらに八大竜王と称される(法華経、序品)もの、すなわち難陀 *nanda*、跋難陀 *upananda*、娑伽羅 *sāgara*、和脩吉 *vāsuki*、徳叉迦 *takṣaka*、阿那婆達多 *anavatapta*、摩那斯 *manasvin*、優鉢羅 *utpala* というように漸次増加していく。

このようにしてみると、仏典においては、*nāga* は(象の意味でない場合には)常に「竜」を意味していたのであつて、自然的動物としての「蛇」を意味したことはないことがわかる。漢訳者が *nāga* を一度も「蛇」と訳さなかつた理由が明かである。蛇は例えばスッタニパータでは *uraga, sirīṃsapa, sappa* として現われる。そして蛇は旧皮を脱するものとして執着をすてる修行者の譬えにとりあげられ(第1~17偈)、毒をもつもの(第1偈)、虵などと並んで人間に害をなすもの(第52偈)として言及されている。これらにおいては、蛇は飽くまでも自然的存在としての蛇である。蛇に対するこのようなイメージはヴェーダの伝統をうけついただものである。ヴェーダ文献では、*ahi, sarpa, sarīṣṛpa* が現われ(Macdonell & Keith: *Vedic Index*, Vol. I. II) (*uraga* はないらしい)、「脱皮するもの」、「毒をもつもの」、「特殊な運動をするもの」として言及されている(Ibid., Vol. I, pp.

50-51)。たとえば「恰も蛇の蛻皮が生命なく脱ぎ棄てられて、蟻塚の上に横わるがごとく、正にかくこの肉身は横わる」（辻直四郎博士訳、Brhad Ā. Up. IV-4-7）。ところが、ここに、突如（？）神格的存在者たる nāga が現われる。仏教がインドの代表的宗教となつて現われたとき（アショーク時代直後）、仏教はすでに nāga を伴っていた。恰かも、アショークが仏教を国教（？）とした代償に、仏教は異端の洗礼を受けねばならなかつた如くである。

ところで、この nāga の彫刻的表現にエジプトのウレウス (uraeus) の表現の影響を見てとるのは邪推であろうか。エジプトでは、第四王朝（前26世紀）以来、王のひたいに（あるいは太陽円盤に、あるいは垂れ帯の先端に）頸部をふくらませたコブラの姿を表わすのが習わしであつた。それはプトレマイオス王朝にまで受けつがれている。ヘレニズム時代に、たとえばギーザのカ・フ・ラー王のスフィンクスのひたいをみた旅人あるいは商人が、これをインドに伝えた可能性はあろう。エジプトのウレウスは単頭で、王のひたいについている。インドのナーガはしばしば多頭で、人物の後頭部についている。このような相違はあるが、頸をふくらませたコブラを頭につけるという共通点のほうを重視すべきと思われる。

さて、西北インドは nāga 伝説に関して特殊な一地域を形成する。伝説の数が多く、また nāga が水に結びつけられている。西域記には烏伏那の阿波邏羅竜泉（大正蔵 51, 882b-c）〔阿育王伝はこの竜泉を罽賓国にありとし、他の經典もそれぞれ別の場所を示す。〕、同じく烏伏那の藍勃盧山の竜池（883b）、迦湿弥羅の竜池（885a）、波謎羅川の竜池（941b）〔＝法顯伝の「毒竜」？ 大正蔵 51, 857c〕などが語られている。中インドにも、目支隣陀竜王が、洪雨の中で樹下に坐す如来を覆つてやつた話があるが、この洪雨は竜王が起したものかどうかはわからない。水に関するこの相違は彫刻においてもみられる。なるほどパールフットでも水中の nāga が表わされているが、サーンチーやアマラーヴァティーでは nāga は水とは切り離されている。ところが、西北インドでは、nāga は常に（欄楯に囲まれた、あるいは囲まれない）井戸（池？）の中にいる。水も蛇口から流れている（Foucher: L'Art Gréco-Bouddhique du Gandhāra, Vol. I, pp. 383-389 & 544-553）。彫刻におけるもう一つの相違は、西北インドでは、執金剛神が仏に伴っていることである。この神はしばしば池の近くの岩を打っている。これは西域記の伝える阿波邏羅竜王（風雨で作物を荒していた）の調伏を表わしているのである。風雨神 nāga を調伏するという積極的な関心は中、南インドの彫刻にはない。西北インドでは、かつてインドラがインダス川の水を抑止するヴリトラを打ち破つたことがあるが

(Rg-Veda, 4-19), その伝統がここに現われているのであろうか。天候に係る *nāga* としては、ほかに、「ひとが雨を請い、晴を祈るとき慰問した」という咀叉始羅国の医羅鉢咀羅竜王がいる (大正蔵 51, 884c)。〔西北インドはブツダが実際にこの地へ赴いたかのような伝説 (史実に反して) を沢山もっている。竜に関していえば、仏は尼連禪河の竜に自己の影を残してやったが (915a~b), 那揭羅曷国でも瞿波羅竜に同じことをしてやっている (879a)。また、医羅鉢咀羅竜王は首は嚩嚩拏城にあり、尾はタクシラにあったという (福蓋正行所集経, 大正蔵 32, 741c)。〕

中国人が最初に *nāga* の語に接したのも西北インドを通してであつたろう。中国人の竜は殷周の銅器以来、足をもち、鬚を生じた姿で表わされている。従つて、もし翻訳者が多頭のcobraと中国の竜のイメージを併せ知つていたら、*nāga* を竜と翻訳することに些か抵抗を感じたかもしれない。しかし、雨に係る巨大な蛇という西北インドの伝統的 (?) 観念が彫刻のcobraのイメージを弱めていたことであろう。

最後に、*nāga* とは一体何語だろうか。M.-Williams の辞書は非アーリア語とし、R. Davids のそれは印欧語 **snagh* (→*snake*) とする。古代インド人の解釈では、*āguṇ na karoti* (「罪を造らない」) あるいは *punabhavaṃ na gacchati* (「再生に赴かない」) から *nāga* という語ができたという (Norman: op. cit., p. 177)。とすればアーリヤ語であるが、もとよりこの種の語源解釈は信用できない。また、ある辞書によると、象をさす言葉として *nāga-hasta* (「蛇に似た手をもつもの」), *nāgadanta* (「蛇に似た牙をもつもの」) があつたが、それが省略されて *nāga* になつたという (これによれば、*nāga* (蛇) が先で、*nāga* (象) が後ということになる) (R. L. Turner: A comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages, O. U. P., 1966)。あるいは、「裸の」*nagna* (→*nāga*) という形容詞が象 (体毛がない) にも、蛇 (毛がない) にも適用されたのだという。J. H. Hutton によれば、山間の未開種族ナーガ族も裸だからそう呼ばれているのだという (The Angami Nagas, London, 1921, p. 5 (Note 1))。〔この説に従えば、従来いわれるように、ナーガ信仰をこの種族に結びつけるのは必ずしも当たらない。彼等はチベット、ビルマ語系人種であり (Ibid., p. 8), 彼等の風俗を写真でみても、ナーガ信仰を思わせるものは何もない。西暦紀元前後に現われるナーガ族については話は別である。〕Vogel は「竜王の名の殆どがドラヴィダ語でなくアーリヤ語である」ことを指摘している (Indian Serpent-Lore, London, 1926, p. 6)。*nāga* の語源についてどの説をとるべきか私にはわからない。〔日本語との関係については、大野晋, 「基本語から語根へ」, 朝日夕刊1971, 8, 5, 参照。〕